

オニールの「野生の社会学」について

——その社会的現実の構成を手がかりとして——

上 田 裕

はじめに

社会的現実が多元的であるということは、どんな立場にある社会学も認めるところであろう。その多角的な社会的現実の内容は多様であっても、その諸現実間に連続性を認めるか、不連続性を認めるかで意見の分かれるところであろう。

オニール (O'Neill, J.) の「野生の社会学」(wild sociology) は、社会的現実を多角的なものとし連続した現実として捉える。社会学者の住む科学的世界と、その研究対象となる日常の人々が住む日常的社会的世界とが連続した社会的現実を構成すると考える。連続と考えることで「野生の社会学」は日常の人々との結びつきを捉え、親密な関係を取り戻そうとする。そのとき、「野生の」という言葉が重要な意味をもつ。

本論では、オニールの「野生の社会学」で前提とされる社会的現実の考え方に三つの論点からアプローチしたい。(一) 社会的現実の基礎となるものは何か。つまり、個人間の相互作用において社会が成立するときに不可欠のプロセスは何か。

(二) このような基礎のうえに具体的な活動が展開する日常的社会的世界は人々にどのようなものとして現われるか。それは身体をとりまく諸制度としての社会的現実であり、オニールがボディ・ポリティック論として展開しているものである。

(三) 社会学が科学として在ることによって分節される社会的現実はどうなものであり、そのとき、含蓄深い「野生の」という言葉がどのような意味をもちうるのか。

以上の論点についてオニールの諸説を概略することで、「野生の社会学」が現代の社会学にたいしてどのような意味あいをもちうるのかを論じたい。

I

社会的現実とは人間にたいして社会として経験的に現われ捉えられる。いいかえれば、社会的現実とは反省的性質(reflexive nature)^①をもつということである。人間の存在なくしては在りえず、人間の意識による反省が在って存在しうる。

オニールは、その社会的現実の基礎として社会を構成するときの三つの基本的プロセスをあげている。社会成立のアプリオリティと考えられるものである。このプロセスを述べることで、「知ること」(“knowing”)の認知的動機づけと表現的動機づけを関連づけようとする。その三つの基礎とは、(一) 認知的基礎としての類型化 (typification)、(二) 表現的基礎としての提示 (presentation)、(三) 関係的基礎としての共利共栄関係 (sympiosis)^②である。それぞれにおいて、個人的―社会的、主観的―客観的、特殊的―一般的、というアンチノミーがある。これらの基礎を述べることで、オニールは、私たちが共通の世界に住んでいることを明らかにしようとする。

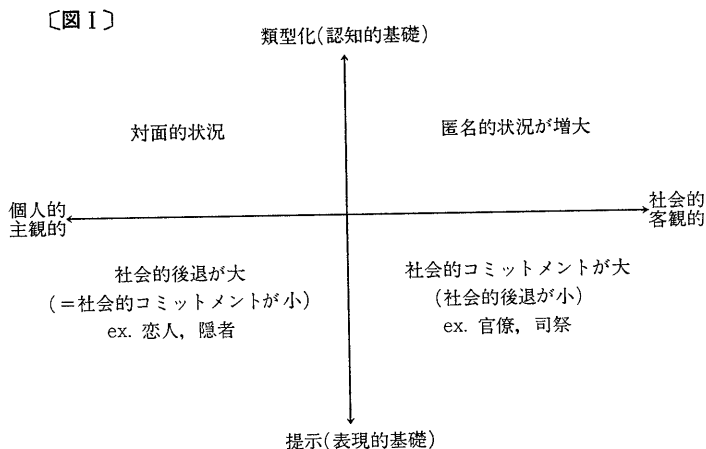
認知的基礎としての類型化は、シュッツ (Schutz, A.) の一連の研究やミード (Mead, G. H.) の「一般化された他者」^④などで論じられていることである。

類型化によって私たちは他者を理解する。類型化が必要なのは、私たちが他者や自己についての十分な知識や想像力を持っていないためである。相互の無知をおおい隠すベールとなる。類型化は特殊なものが一般的なものとして私たちに与えられるやり方であるが、他者が特殊なものとして現われる対面的状況から匿名性 (anonymity) の増大という類型化の範囲がある。匿名的状況では、職務やレリバンズや身ぶりや言語やコンテキストのレパートリーは、自明とされるものと問題となるものとの間で分裂することなく共通に想定される何かとして変化する。類型化の現象は主観の意味と客観の意味のアンチノミーが前提とする客観の意味のコンテキストを表わす。そのことを明らかにしうるのが意味と理解の構成的現象学である。^⑤

表現的基礎としての提示はゴッフマン (Goffman, A.) の研究にみられるものである。

私たちは或る社会的場面において示された他者しか知りえない。提示とは或る場面で自己を決定する他者にたいして自己を提示することを意味する。提示には社会的コミットメント (social commitment) と社会的後退 (social withdrawal) のアンチノミーがある。このことは、人々がいくつかの生活を送るのではなく、人々が多様な生活を送ることができることを示している。そのアンチノミーを連続体として考えることでその多様な生活を表わすことができる。たとえば、最高のコミットメント——最低の社会的後退——は官僚であり司祭である。社会への帰属を強く示す。また、最低のコミットメント——最高の社会的後退——は恋人や隠者である。したがって、人々が多様な生活を送るということは、同一人物が官僚であり恋人であることができるということを表わしている。^⑥

以上のことから、類型化と提示を縦軸とし、それぞれにあるアンチノミー——社会的——個人的、客観的——主観的



——を横軸にとって図式化すると〔図Ⅰ〕のようにまとめることができるだろう。

人間関係における基礎としての共利共栄関係は類型化と提示が前提となるプロセスである。このことは、まず社会関係が成立するための出発点として相互作用のパートナーを知っていることが必要であり、パートナーの行為や動機や状況についての類型化と提示が行なわれ、相互に信頼が生じ受け入れることによって社会関係が成立する、ということの意味している。このプロセスには、各人が社会的相互作用の儀式を維持する自尊心と意思の諸規則があるといえる。このようにして社会関係として成立した社会は、超越性として私たちに経験される社会であると同時に、私たちの先天的欲求(needs)や後天的欲求(wants)に適合する社会であり、私たちの日常活動やレリバンスの図式に適応させられる社会でもある。つまり、私たちにたいして社会は外在的であり内在的である、あるいは、私たちの存在にたいして先行し存続するものであり私たちによって創り出されるものである、ということになる。使命(vocation)と共利共栄関係のアンチノミーがあることになる。^⑧

このような社会が成立してくるうえで基礎となるプロセスの考察

は、日常生活の基本的形而上学と呼ぶものである。こうした考察も知識社会学の問題関心としてあるわけだが、社会学一般は、先に述べた三つのプロセスによって創り出された社会を自明のものとして行なう日常的活動やそれによって生じる社会現象により関心をもつ。自明視された社会において日常の人々が経験する社会的現実はこのようなものであるのかを考察する必要がある。

II

ここでは、オニールの独自の「ボディ・ポリティック」(Body Politic)^⑨論では社会的現実をどのように捉えているか、つまり、社会生活をどのような構成要素の連関と考えていたかを述べる。

オニールは、社会的現実を政治的——秩序がどのように形成されるか——に捉えようとする。その秩序の概念は、身体の各器官の秩序正しさが健康をもたらすという意味にアナロジーして用いられる。そのための枠組がボディ・ポリティックである。したがって、ボディ・ポリティック論は、制度的危機の時代に必要な政治的権威と社会的コンセンサスの基盤——つまり、政治的生活の基本構造であるボディ・ポリティック——を再構成することをめざす。^⑩ボディ・ポリティックは、〈家族生活〉(family life)・〈経済生活〉(economic life)・〈個人的生活〉(personal life)をとりまく先天的欲求(needs)と後天的欲求(wants)の複雑構造を分節化する。さらに、これらの生活に対応して、三つのレベルの価値——目標構造——と制度システムに分節される。^⑪

ボディ・ポリティックが分節する三つの価値とは、有機的価値(Organic Value)・生産的価値(Productive V.)・リビド的価値(Libidinal V.)であり、独自の様式(Mode)で表出する。^⑫それぞれの様式とは生物学的欲求(Biological Needs)・社会的欲求(Social Wants)・リビド的表現(Libidinal Expression)である。それらの価値様

式は政治的權威と社会的コンセンサスの根本的基盤の規準目もりとして役立つ^⑮。

これらの三つの価値は言語 (language) 、労働 (work) 、政治 (politics) というメディアを媒介にして制度化される。これらのメディアを創り出す秩序の間には本質的關係がある。それゆえ、仕事において自由ではない人は語る自由もないということになる。さらに、これらのメディアを用いた人間の活動は、その活動の担い手である共通の伝統とアイデンティティを創り出す発話 (speech) と創造 (creation) と市民活動 (citizenship) によって表現され、日常的社会的世界や文化と關係づけられる^⑯。

このようにして制度化された価値の個人的生産と社会的生産を潜在的に実現し統合するのが制度システムである。その制度システムにおいて動員される資源が、家族制度的資源 (Family Institutional Resource) 、經濟制度的資源 (Economy I. R.) 、個人制度的資源 (Person I. R.) となる^⑰。

かくして、身体をとりまく諸価値がメディアを通じて制度化されまたそのメディアを用いた活動によって表現され日常的社会的世界と關係づけられるとき、ボディ・ポリティックの三つの形態——政治的経験の存立構造——が成立する。それぞれは、有機的ボディ・ポリティック (Organic Body Politic) 、生産的ボディ・ポリティック (Productive B. P.)^⑱、リビド的ボディ・ポリティック (Libidinal B. P.) と呼ばれる^⑲。

有機的 B・P^⑳ は人々が自分たちの福利と身体的健康と再生産において持っている諸インタレストを集めるといふひとつの方法を表わす。生産的 B・P は B・P の社会的再生産に費される肉体的労働と知的能力の複雑構造を表わす。リビド的 B・P は家族と經濟の利益を超越しているがゆえにパーソナリティの秩序を実現するという欲望のレベルを表わす。このような個々の B・P において、生活での身体的秩序と社会的秩序とリビド的秩序が創り出される。それぞれの秩序は B・P の個別の業務の結果ではない^㉑。

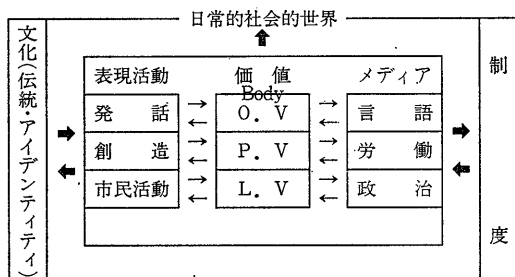
〔図Ⅱ〕

ボディ・ポリティック Body Politic	価値 Value	価値の様式 Mode	制度化メディア Media	制度的資源 Institutional Resource	生活 Life	秩序 Order
有機的B.P. Organic B.P.	有機的価値 Organic V.	生物学的欲求 Biological Needs	言語 Language	家族 制度的資源 Family I.R.	家族生活 Family L.	身体的秩序 Bodily O.
生産的B.P. Productive B.P.	生産的価値 Productive V.	社会的欲求 Social Wants	労働 Work	経済 制度的資源 Economy I.R.	経済生活 Economic L.	社会的秩序 Social O.
リビド的B.P. Libidinal B.P.	リビド的価値 Libidinal V.	リビド的表現 Libidinal Expression	政治 Politics	個人 制度的資源 Person I.R.	個人の生活 Personal L.	リビド的秩序 Libidinal O.

オニールの「野生の社会学」について

〔図Ⅲ〕

Body Politic



オニールの「野生の社会学」では、日常的世界は身体をとりまく諸価値が処理されることで生じる秩序——政治的秩序——として現われる。その日常的世界に社会学が関わることでその秩序の成立に問題を投げかける。「野生の社会学」はその点を問題にする。

これら三つのB・Pは相互に影響を与え合い連動する複雑現象をなす。たとえば、疎外(alienation)という現象は、有機的先天的欲求を充足すること、また、生産関係を円滑に処理することだけでは解消されない。リビド的身体の諸要求を充たさなければ解消しない現象である。^②

以上、B・Pを構成している諸要素とそれらの連関を概略ではあるが述べてきた。図表化してまとめると、

〔図Ⅰ〕と〔図Ⅲ〕のようになるだろう。

Ⅲ

これまでは、社会成立の基礎とされる社会的現実と、身体をとりまく制度システム（B・P）としての社会的現実についてのオニールのその道具立てをおおまかではあるが述べてきた。それぞれは日常生活の基本的形而上学と呼ぶるものとB・P論の論究対象となる社会的現実であった。ところで、社会学が科学として在ることによって区別される社会的現実——社会学者が経験する社会的現実——が考えられる。その現実とは日常的社会的世界にたいうる科学的世界である。オニールの「野生の社会学」はその両世界を連続した社会的現実として捉えようとする。その連続性を説明するための重要な意味を「野生の」(wild)⑩はもつと考えられる。

日常的社会的世界は、類型化と提示と共利共栄関係のプロセスを通じて、また、身体をとりまく諸価値の制度システムを通じて創り出される秩序として経験される。その日常的世界は私たちに先行して存在し、常に秩序正しい図式として私たちに対面している日常経験の世界である。⑪その世界を私たちに自明のものとして出現させ自然的態度をとらせるのは日常的常識的理性である。その理性の担い手は身体であり、身体を通じて日常的世界との関係が生じる。したがって、その日常的世界は知覚的経験の世界であり、身体によって時間的空間的に限定された世界である。

このような日常的世界に距離を置くことで認識し理解しようとする認識主体が属する世界が科学的世界である。この世界を秩序づけるのが合理性——科学の下位合理性を含む——である。けれども、両世界を分離しては社会学は日常的世界を理解できないというのがオニールの立場である。また、この合理性が私たちと生活や自然とのあらゆる関係を抑圧するものとして現われる以上、こうした抑圧からの解放をめざすためにも両世界を分離できない⑫という。

人間関係や慣習や制度として現われる人間的秩序——日常的世界——は前理論的行為 (pretheoretical conduct) から生じる。その前理論的行為は、他者についての未分節の常識的知識と、人間の身体や時間や場所のレリバンスに表現されている先天的欲求と後天的欲求を経験するときの行為によって創り出される。したがって、この秩序の性質は、個人生活や社会生活の常識的知識を現実主義と客観主義の基準——科学的行為の行動原理——に従わせる教条的合理主義では明らかにできない。^④

そこで、オニールは科学的世界を秩序づける合理性を長期間にわたる歴史のプロセスの構築物と考えることで両世界を連結しようとする。その歴史のプロセスは自らが組み込まれている社会秩序を分析しようとする社会学的論理化 (sociological reasoning) の形式が前提とするものである。^⑤

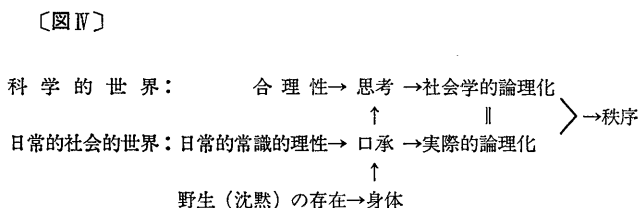
つまり、日常的世界での実際の論理化 (practical reasoning) と科学的世界での社会学的論理化の間には時間的連続性が在ると、オニールは想定しているといえる。

このような時間的連続性の考え方は、ヴィコ (Vico, G.) の語源学 (philology) ——言語と思考は不可分であり、言語の過去の意味を探ることである当時の人々の生活を理解しようというもの——にすでに在るといえる。その連続性とは、思考 (thinking) に先立って口承 (speaking) が在り、さらに身体 (body) が在る——time's body——という先行関係を示すものである。このヴィコの科学をオニールは「ヴィコの野生の社会学」と呼んでいる。^⑥

結局、オニールは、あらゆる秩序づけの根源には沈黙の存在 (the silent) つまり野生の存在 (wild being) が在るのであり、社会学はその存在の上層の表面を扱っているにすぎない、という。^⑦

両世界と野生の存在との関係を整理し図表化すると「図Ⅳ」のようになるだろう。

オニールの「野生の社会学」は、人々と世界との親密な関係を取り戻すためにも、その秩序づけられていない野



生の存在に出発点を求める。そのためには、社会学は自らが成立してきた歴史をたどる必要がある。また、その歴史を忘れるのではなく記憶 (remembrance) に留める必要がある。さらに、目的手段といった関係で現実を捉える散文ではなく、私たちの生活に本質的である詩 (poetry) によって表現しなければならないことになる。

社会学が自らの歴史を知るための手段として自己反省 (reflexivity) が在る。その自己反省は、絶対知の全体的自己反省ではなく、B・P内での政治的理論化の担い手となる限定的自己反省 (limited reflexivity) である。それは、超越論的に構成される自己反省ではなく、制度としての自己反省である。社会学は、この制度化された自己反省によって、文化、階級、伝記における下部一構造を知ることができる。さらにこの制度としての自己反省の概念から批評 (critique) の考えを引き出してくる。批評というのは、伝統と反抗を創り出す認識と批判のアピールにある修辭学的性質を解釈することである。話し言葉や読解や著作にあるレトリック的伝達手段に注目し解釈する。批評は一群の社会科学的知識が地平的に開示していることで、また、集団所属と伝統に基礎づけられることで可能になる。このような自己反省と批評が可能になるためには、記憶が必要になる。この記憶とは政治的知識と政治的行爲の身体的下部構造である。革命の科学的文化と同様に、文学、芸術、

歌、詩、を産みだす。また、記憶は自由と正義を内的に産みだすものであり、抑圧からの解放の担い手となる。したがって、野生の社会学者は人々と共に働き、意味構成の共同作業に参加し、身体に記憶として留めなければならぬ。そのとき、人々と世界と絶えざる対話があって記憶が可能となる。その対話において用いられる言語の表現

形式が詩である。あらゆる言語——科学言語、日常言語——は散文である前に詩である。^③野生の社会学者は詩的に表現することを要求される。私たちの精神的なものを直接に表現することであり、表現されたその言葉の意味を一方的に押しつけるのではなく、解釈者は自らに開かれた地平の知識にもつき解釈すればよいことになる。^④結局、「野生の」という言葉は歴史的ということであり、詩的であるということにまとめられる。なぜなら、歴史的这个ということと詩的ということ、日常的社会的世界と科学的世界とを時間的連続性のもとで連結しうるからである。

IV

ここでは、これまでの議論から、オニールの「野生の社会学」が現代の社会学にたいしてどのような意味あいを持ちうるのかを結びにかえて簡単に論じてみたい。

まず、第一に「野生の社会学」は、これまで社会学的伝統ではあまり論じられることのなかった「身体社会学」(sociology of body)^⑤を提起しているといえるだろう。ミクロとマクロの二つのレベルで身体社会学を考えることができる。ミクロレベルでは、他者や世界との関係づけの接点を身体に置き、表現・認知の主体を身体とすることで、言語の意味以前の意味——たとえば、単なる喧噪にすぎないかのようなウッド・ストックなどのロック・コンサートや現代の視聴覚文化——を理解しうるのではなからうか。また、単なる技術に還元しえない労働や行為——手術、ピアノ演奏、綱渡りなど——も理解しうるだろう。マクロレベルでは、身体を結節点とする社会構造論への展開が考えられる。そのときの社会的行為の主体は身体である。身体的主体は身体をとりまく諸価値をメディアを通じて他者と相互作用を行ない制度化する。それと同時に身体的主体は構造化される。身体を外在的に拘束

する社会構造が考えられる。もちろん、オニールのB・P論はこの点を論じているといえる。このような身体主体の社会構造論から、性的な身体的特性の違いを超えて男女平等を唱えるウーマン・リブ運動[®]や身体的若さゆえの若者反抗などは解明しうるであろう。

第二に、「野生の社会学」は社会学の限界を考えさせる。この「野生の」という言葉は、認識上でも社会的活動上でも秩序づけられていないことを意味する。野生の社会学者はその野生の存在から出発するのである。日常世界と科学的世界とが連続している限りは、その秩序づけに参加しなければならぬ。つまり、日常言語——詩——をもって人々と共に意味を創るという共同作業に参加しなければならないのであり、変革を求める人々と共に新たな秩序を創る共同作業に参加しなければならないのである。だがそのとき、日常的活動と社会学的活動——この場合、共同の秩序構成——とが同じ次元で成立するものならば、社会学の学としての独自性——オニールはこの独自性を否定しているように思えるのだが——をどのようにして持ちうるのだろうか。また、人々と同一の時・空間での秩序構成作業が理論化よりも優先するものであるとするならば、理論化なき社会学とは何であろうか。その社会学は新たな秩序を求める人々に何をなしうるであろうか。このような問に答えようとする努力が「自己反省の社会学」になるであろう。

オニールの「野生の社会学」でイメージされる野生の社会学者像は、教壇に身を置きながら自分のフィールドにおいて日常の人々と共同作業をする社会学者ではなく、日常の人々が社会学をする姿である。したがって、今、教壇にある社会学者の仕事は、支配の構造——抑圧者の眼で被抑圧者をみることに——に同化することなく、日常の人々を社会学者となるべく教化することになるであろう。そのとき科学と日常的常識的知識と価値との間の政治的關係を人々に分らせることが必要になる。いいかえれば、これはフレイレ (Freire, P.) のいう「意識化」(con-

scientization) とういうことにならう。^③

オニールの「野生の社会学」は、ややもすれば管理主義的になりがちな現代の社会学に警鐘を鳴らしたという点で評価されよう。だが、まだまだ多くの問題が残っているものであり、イントロダクションで留まっている「野生の社会学」の今後の展開を期待したい。

註

- ① O'Neill, J. "On Simmel's "Sociological Apriorities", *Phenomenological Sociology*, Pashus, G. (ed), John Wiley & Sones, 1973, p. 102.
- ② Ibid, pp. 86-106.
- ③ Natanson, M. "Phenomenology and Typification : A Study in the Philosophy of Alfred Schütz", *Social Research*, Vol. 37 (Spring) : pp. 1-22 1970, 参照。
- ④ Mead, G. H. *Mind Self and Society*, Morris, C. W. (ed), The University of Chicago Press, 1962. 『精神・自我・社会』 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収・訳 青木書店 一九七三。
- ⑤ O'Neill, J. 1973, op. cit., p. 93.
- ⑥ Ibid. pp. 93-97.
- ⑦ Ibid. pp. 97-98.
- ⑧ Ibid. pp. 100-102.
- ⑨ Body Politic ならん言葉は英和辞典ならん「国家」

とういう訳が出ているが、「共通の治安、防衛、福祉のために、共通の権力によって一人格として統合された多数の人間」(ホッブズ)や「社会団体+政治組織」(ウィロビー)や「最高の地縁的団体」(ラスウェル)、『政治学辞典』下中邦彦編、平凡社、昭和二十九年、二二六八頁)ともなうに「国家」とは区別される。オニールはこれらの意味とも異なった独自の意味で用いらる。

- ⑩ O'Neill, J. "Authority, Knowledge and the Body Politic", *Sociology as a Skin Trade*, Heinemann, 1972, p. 68.
- ⑪ O'Neill, J. "Language and the Legitimation Problem", *Sociology*, Vol. 11, No. 2, May, 1977, p. 355.
- ⑫ Ibid. p. 355.
- ⑬ O'Neill, J. 1972, op. cit, p. 69.
- ⑭ O'Neill, J. "Can Phenomenology be Critical?", *Sociology as a Skin Trade*, Heinemann, 1972,

p. 225.

⑮ O'Neill, J. 1977, op. cit. p. 355.

⑯ 一九七二年の論文 (O'Neill, J. 1972, op. cit. p. 72.) では、生産的ではなく感覚的 (Sensible) という言葉を using する。

⑰ O'Neill, J. 1977, op. cit. p. 355. したがって三つのボディ・ポリティックの考え方は、オニールが古典的メタファーと呼んでいるように、プラトンの「魂の三分」——理性的部分、気慨的部分、欲望的部分——の分け方などが念頭にあったのではないかと思われる。さらに、アレント (Arendt, H.) が人間の活動力を三つの基本的構成要素——生物学的必然への奉仕としての労働 (labour)、自然の変形・支配としての仕事 (work)、人間の自由としての活動 (action) ——に区分する考え方 (Arendt, H. *The Human Condition*, the University of Chicago Press, 1958, 『人間の条件』、志水速雄訳、中央公論社、一九七二年、九一—二八五頁) に、また、社会的行為を言語と労働と支配の連関とするハベマス (Habermas, J.) の考え方に多い多くの示唆を受けているように思える。

⑱ 以後、ボディ・ポリティックを **B・P** と表記する。

⑲ Ibid. p. 355.

⑳ Ibid. p. 356.

⑫ この「野生の」 (wild, savage) という言葉で起ちあげられるのは、メルロー＝ポンティの「野生の存在」であり、レヴィ＝ストロースの『野生の思考』であるが、それらとオニールの「野生の社会学」との関連は別の機会で論じてみたい。

⑬ O'Neill, J. *Making Sense Together — introduction to wild sociology—*, Haper & Row, 1974, p. 40.

⑭ O'Neill, J. "Gay Technology and the Body Politic", *The Body as a Medium of Expression*, Benthall, J. & Polhemus, T. (ed), Allen Lane Penguin Books Ltd, 1975, p. 231.

⑮ O'Neill, J. 1973, op. cit. p. 92.

⑯ Ibid. p. 103.

⑰ O'Neill, J. 1974, op. cit. pp. 32-38.

⑱ Ibid. p. 53.

⑲ O'Neill, J. "Critique and Remembrance", *On Critical Theory*, O'Neill, J. (ed), The Seabury Press, 1976, pp. 4-5.

⑳ O'Neill, J. 1974, op. cit. p. 14.

㉑ O'Neill, J. 1972, op. cit. pp. 226-234.

㉒ O'Neill, J. 1976, op. cit. pp. 4-5.

㉓ O'Neill, J. 1974, op. cit. pp. 3-12.

③ Ibid. pp. 14-27.

④ 特に、1974, *Making Sense Together* では、オニールは意図的に、一方的に規定された意味内容与えることを避け表現しているようである。詩的表現といえるかもしれない。オニールは著書を通じて読者と対話し読者に実際の論理化を強いているように思える。

⑤ オニールはこの「身体の社会学」を近刊予定である。(O'Neill, J. 1977. p. 357)

⑥ オニールは、性的違いを超えた男女平等を求めるウーマン・リブ運動がパラドクスに陥っているという。つま

り、男女平等が男性の職場への進出を意味するならば、女性が進出した世界は、男性が既に放棄した「機械の世界」——中性的職場——であることになる。

⑦ O'Neill, J. 1975. op. cit. pp. 292-300.

⑧ O'Neill, J. 1976. op. cit. pp. 9-10. 「意識化」について、Freire, P. *Pedagogia do Oprimido*, 1970, 『被抑圧者の教育学』、パウロ・フレイレ、小沢他訳、亜紀書房、一九七九、を参照。

(社会学研究科博士後期課程三回生・社会学専攻)

